

〈書評〉

富田虎男／清水透 編 『「他者」との遭遇』, (歴史学研究会 [編], 『南北アメリカの500年』第1巻), 青木書店, 1992年, 314ページ

小 林 致 広 (神戸市外国語大学)

本書は歴史学研究会 [編] の『南北アメリカの500年』(全5巻) の第1巻である。この講座の目的は、米国史偏重の、白人支配層中心の「アメリカ」各国史という、従来支配的であった「世界史」記述の枠組みを打破し、南北アメリカ大陸全体を通史的に描き、多様な「アメリカ」イメージを提供しようというものである。この講座が企画された背景には、「500周年」という状況があったことは言うまでもない。

1492年以降の南北アメリカ大陸の500年にわたる歴史過程は、これまで西欧文明による発見、征服、侵略、福音伝道、環境破壊、低開発、つまり「近代文明化」の過程として記述されてきた。しかし、かなり以前から、ミゲル・レオン・ポルティエリヤなどによって、こうした「勝者の歴史」から削り落とされた「敗者の歴史」を救済する必要性が主張されてきた。そして近年では、一方的に規定される「敗者」にかわり、双方向的な関係を含意する「他者」という用語が、好んで使われるようになってきている。この潮流の嚆矢となったのが、ツヴェタン・トドロフの『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』(1982年フランス語版, 1986年日本語版, 法政大学出版社)であることは言うまでもない。富田虎男／清水透両氏の編集した第1巻がタイトルとして『「他者」との遭遇』を採用しているのも、こうした傾向を念頭に置いたものと考えてよいだろう。

本書の基本構想や編集方針は、序章1における清水氏の「「発見」—その

世界史的意味をさぐる」に要約されている。アメリカ大陸という空間は、ヨーロッパ「世界」が新たな自己発見をおこない、ヨーロッパ近代そのものを鍛えていく場と設定されている。そして先住民やアフリカ系住民、諸種の混血者といった「他者」たちにとっては、それぞれの苛酷な状況にあわせ近代的な自己へと再生してきた場でもある。このような空間としてアメリカ大陸は「世界史」のなかに位置づけられている。

本来なら双方的関係である「他者」が、一方の当事者によって専横的に規定され始めたのが、500年前の「発見」である。南北アメリカの歴史を近代以降の「世界」秩序の成立過程のなかに位置づけるため、本講座における歴史叙述の出発点は、このような一方的関係が確立した植民地期に設定されている。その時代を「三つの人種」の「出会い」と葛藤の時代として位置づけ描きだすことが、第1巻のテーマとうたわれている。

「コロンの発見」以前の諸先住民社会の歴史は、序章2において簡潔に触れられているだけで、本書の直接的主題から外されている。これは、新しい「世界史」像の構築という編集者たちの意図からすればやむをえなかった措置であろう。しかし、そのことは、「世界史」の著者性を占有してきたものに自己を同一化し続けてきた我々の視線が、いまだにきわめて限定されていることを示唆しているのではなかろうか。

本書を構成している諸論考について、それぞれの内容を要約し逐一コメントをおこなうことは、評者の問題関心の偏在や既往の研究に関する知見の不備から、不可能である。また、各執筆者の競演を整理する必要もなかろう。「過大な期待」を抱いた一読者としての評者の気を引きたいいくつかの点について、簡単に述べてみたい。

「発見された「他者」と題する第1章には、石原保徳、竹中豊、白井洋子の三論考が所収されている。石原氏の論考は、旧稿「新世界の挑戦—ヨーロッパの発見にむかって」（『歴史学研究』595号、1989）の延長線上にある。「他民族」の苦難に対するヨーロッパ人の無知、無感覚を告発し、「裏切るヨーロッパ」を描き出そうとする「大西洋人」ラス・カサスの視線を、

当時のウマニスタや帝国の記録者たちの手になる「新しい年代記」=「征服記」の視線と対比しつつ、描きだそうとしている。先スペイン期の支配層の末裔を自称する先住民たちの手になる「新しい年代記」が、氏の問題関心のなかでどのように位置づけられているのか、一端でも垣間見たいと思うのは、高望みであろうか。

竹中氏は、ヌーベル・フランスのヒューロン・イロコイとフランス人（宣教師、軍人、毛皮交易人）たちの相互認識のタイポロジーを整理し、フランス側の「キリスト教化」、「同盟化」、「交易化」という対先住民政策は、理論的には力関係における対等性を前提としていたと説く。一方、白井氏は、イギリス人入植開拓地から離れた「奥地」では、先住民が他人の物質的幸福を羨むことのない「無垢の人々」として認識されることもあり、ヨーロッパ人も持ち込む文化要素にしたがって、「鉄細工師」、「織布職人」、「長いナイフをもつ人」などと呼ばれていたことを指摘している。

先住民とヨーロッパ人とのあいだに成立していた相互の「他者」認識における非従属的關係を破壊した原因として、両地域で異なったものが想定されているのが興味を引く。ヌーベル・フランスにおいては、先住民の外来要素（疫病、アルコール飲料）に対する抵抗力の欠如、節度・抑制・体面といった心性の欠如など、先住民側の文化的「体質」にその原因が求められている。一方、イギリス人入植地では、「怠惰なインディアン」の死滅は神の意志であり、彼らが一掃された「バージンランド」こそピューリタンにとっての約束の地であるという選民的な使命感がその原因とされている。これらは、人対人の対話能力に長けるヨーロッパ人、人対神の対話能力を重視するインディオ、というドドロフの図式でも解釈できるだろう。

Bernadette Bucher（ド・ブリーの『大航海記』の挿し絵）や Mercedes López-Baralt, Rorena Adorno（ワマン・ポーマの『よき政治と新しき年代記』の挿し絵）らは、当時の年代記等に挿入された図像の記号論的分析から征服者側の政治的イデオロギーや植民地社会における支配・被支配構造を解明しようとしている。彼らの研究（Mercedes López-Baralt ed.

Iconografía política del Nuevo Mundo, Editorial de la Universidad de Puerto Rico. 1990) や、1992年度の日本ラテンアメリカ学会での落合一泰氏の発表などと一脈通じた論考が、この章で試みられるか紹介されていると、「他者」認識の諸相についての読者の視野はより立体的になっていたであろう。

第2章の「征服」と「清掃」では、スペイン人植民地社会の編成過程が宮野啓二によって、北米植民地社会の編成過程が、竹中豊（フランス植民地）、和田光弘（イギリス植民地）、白井洋子（オランダ植民地）によって考察されている。いずれの論考も、宗主国による帝国システムのなかでの各植民地の位置付けの差異に対応して、入植者の形成する植民地社会の編成や強度が異なることを例証している。

宮野氏の論考は、スペイン植民都市の組織原理（都市プラン、自治制度、住民構成）を概観し、スペイン人が初期に導入した先住民分離・隔離政策や、人口急減後の先住民集住政策によってインディオ社会がどのように変容したかを解明しようとしている。その説明は、欧米の研究成果のいくつかを整理した「教科書的」なものとなっている。とりわけ、征服前のアステカ社会の説明で、カルプリアマイエケという、1970年代以降のエスノヒストリー研究の進展によって実在性に疑義が提出されている用語が相変わらず使用されている点は、この分野の研究者（評者を含む）の怠慢と自戒せざるをえない。

「先住民を一掃し土地を征服」したイギリス植民地だけでなく、「先住民たちの労働力を征服」したはずのスペイン植民地の大部分においても、先住民の「清掃」は進展した。不足する労働力を補完するための黒人の強制的「植民」というメカニズムによって、「アメリカ」に奴隷制は現出した。これを中心的に論じたのが第3章の論考である。

ブラジルにおける奴隷制を論述した鈴木茂のスタイルは、評者にとってきわめて説得的なものであった。ブラジルに在住した総督やイエズス会士の証言記録だけでなく、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』、ダーウィ

ンの『ビーグル号航海記』というイギリス人の作品に描きだされたサトウキビ農園主や奴隷制についての観察、画家の残した風物画などを巧みに利用して、温情的な奴隷主という神話に潜む奴隷制の「恐怖」など、ブラジルの奴隷制の諸側面を手際よく描いている。カリブ海地域の奴隷制を「世界システム論」の立場から論じたのが西出敬一の論考である。カリブ海地域プランテーション・システムの血液として導入された黒人奴隷とプランターによって作り出されたマイクロコスモスとしてのプランテーション社会については、石塚道子編の『カリブ海世界』(世界思想社, 1991)に所収された論考やシドニー・ミンツの『甘さと権力』(平凡社, 1988)と合わせ読むとよく理解できよう。

「民族性の自己再生」と題された第4章には、ペルー社会を対象とした網野徹哉の論考と、北米南部社会を論じた西出敬一(黒人奴隷社会)と和田光弘(白人社会)の論考がある。しかし、後二者の視線は、白人社会の在り方に向けられており、必ずしも民族性の自己再生というテーマに沿ったものとなっていない。西出氏は、北米南部の黒人奴隷制プランテーションを基盤としたプランター貴族寡頭勢力とデモクラシー勢力とを糾合させたイデオロギーが、人種排外主義であることを指摘している。和田氏は「新しい社会史」の手法のひとつである人口学的研究により、18世紀に家父長制的「家族」が支配的となっていく過程を解明しようとしている。

多くの読者(評者を含む)にとって、網野の論考は本書のなかでもっとも刺激的なものだったのではなかろうか。17世紀初頭のリマに居住するインディオのなかに、アジア系の「インディオ」が存在していたことを手がかりに、「スペイン人」対「インディオ」という完結したイメージの深層で展開していた多様な民族性の交差を究明している。そうしたなかで、「インカ」という求心的シンボルが、都市下層に生きる「魔女」たちや、18世紀の反乱のプロジェクトのなかで、分岐していくアンデスの民族性を統合するため原理として登場した過程を解明している。メソアメリカにおける先住民・農民反乱でも類似の現象がみられ、両地域の比較研究が要請されて

いるのではなからうか。

こうした比較研究を含め、南北アメリカの植民地史を有機的に結合することは、編集者もあとがきで述べているように、今後の課題として残されている。従来の「世界史」叙述に対する挑戦が各執筆者によって試みられたことは、たしかであろう。しかし、豊かな世界史像の構築となるとまだおぼろげにも見えてこない。

私たちは、「世界史」体系に基づき、自己の帰属する社会の歴史が記述されることや、記述したりすることを望まない人たちがいることも、忘れてはならないであろう。500年の歴史過程を、押しつけられた「文化変容」や「シンクレティズム」の過程ではなく、固有の歴史発展として自己認識している社会が複数存在している。入植者による居住地からの追放すら、自集団の「悪きもののない世界」への到達の過程として語ろうとするグアラニー、1985年の大地震を「第5の太陽（世界）」、つまり植民地主義支配の終了を告げる予兆と解釈しようとするメヒカニスタたちがいる。自己の属する社会集団の「創設神話」がきわめて精力的に「創造」されたのは、植民地期であった。彼らの歴史観を、「メシア主義的歴史観念」と、我々は片付けてきたのではなからうか。

「ひとつの世界史」が可能であるという考えは、現在と未来の「世界」を自分の掌中におさめようとする人たちに不可欠のイデオロギーであり、幻想である。このような「ひとつの世界史」を拒否する「他者」の歴史意識を、「新しい世界史」の名のもとでどのように扱うのであろうか。この疑問は本書を読み終わっても解消しなかった。